

2026.01.11.

## 「飢えることなく、渴くことなく」

旧約 イザヤ書49章7～10節

新約 ヨハネによる福音書6章34～40節

### 1. はじめに

ヨハネによる福音書から御言葉を受けています。ヨハネによる福音書の6章は「5千人の給食」の出来事から始まりました。そして、「5千人の給食で与えられたパン」、これは元々は5つのパンでしたが、配っても配っても尽きることがありませんでした。この時、成人した男性だけで5千人、女性や子どもを加えれば1万人を優に超える人々がこの5つのパンと2匹の魚で養われ、腹一杯に満たされました。この奇跡、イエス様が神の御子であるこの「しるし」は、私にとって長い間よく分からない、何が起きたのかをイメージすることさえ出来ない出来事でした。足の萎えた人がイエス様によって癒やされて歩けるようになる。目の見えなかった人が、イエス様によって見えるようになる。このような奇跡は、不思議なことだとは思いますが、何が起きたのをイメージすることは出来ます。しかし、この「5千人の給食」の出来事は、何が起きたのかをイメージすることさえ出来ませんでした。弟子たちはパンを配りました。イエス様は5つのパンを弟子たちに配られたのですから、きっとちぎったパンを弟子たちに与えられたのでしょう。そして、それを配ると、弟子たちの手元にはパンは無くなっているはずですが、しかし無くならない。配り続けた。「そんな馬鹿な」と、私はずっとそう思っていました。何が起きたのかさえイメージ出来なかったのです。しかし、あるとき「イエス様は天地を造られた神様の御子、無から有を生み出されたお方のただ独りの御子」であるならば、どうして「質量保存の法則」という物理法則に縛られなければならないのかと気づきました。そして、この時「弟子たちの手には、パンを配るとまたパンが生じる」ということが起きたのではないかと。それも一回じゃない。一人一人の弟子たちの手の中で、この出来事が、千回かそれ以上繰り返し起きた。そのようにこの出来事を受け止めるようになりました。そうしますと、どうしてこの出来事が4つの福音書の中で、復活を除いて全ての福音書に記されている奇跡であるのか、ヨハネによる福音書が告げるところの「しるし」であるのかということが、腑に落ちました。この出来事は、弟子たちが直接イエス様の御力を体感した出来事、イメージすることさえ出来ないほどの、あり得ないこと、あるはずのない出来事だった。だから、弟子たちはずっと忘れることなく、共通の記憶として残った。つまり、イエス様が質量保存の法則、弟子たちは勿論こんな言葉は知りませんでしたけれど、このあり得ない出来事が、イエス様トイお方がどういうお方なのか、つまり天地を造られた神様の独り子であることを最も明らかに示している出来事として記憶されたのでしょう。

## 2. わたしが命のパンである

このあり得ない「5千人の給食」の出来事を手がかりに、イエス様と人々との対話が始まります。そして、ヨハネによる福音書特有の、一つの言葉に幾つものイメージを重ねていって、遂に福音へとたどり着くありかたで記されています。ここでは「パン」という言葉に幾つものイメージを重ねていきます。

最初、このパンは誰でも知っている、いつも食べているパンです。このパンは、インドカレーのお店に行けば出てくるナン、それが直径15.6センチの丸くなったものを思い浮かべていただければ良いでしょう。しかし、それは配っても配っても無くならず、考えられないほど多くの人たちを満腹にしました。人々にとって、そのパンは腹を満たすただのパンでした。しかし、イエス様はこの「パン」を用いて、朽ちる食べ物と朽ちない食べ物がある。そして、「**朽ちる食べ物**」を求めるのではなく、「**朽ちない食べ物**」「**永遠の命に至る食べ物**」を求めるようにと告げられました。イエス様は「パン」を用いて「**朽ちない食べ物**」「**永遠の命に至る食べ物**」へとイメージを広げます。人々は肉体の命しか考えていませんでしたけれど、イエス様は永遠の命に眼差しを向けさせられました。そして、人々はこの「5千人の給食」を出エジプトの旅の間中、神様によって与えられ続けた「マンナ」と重ねます。イスラエルは荒野の40年の旅の間中、神様が日ごとに与えてくれる「マンナ」によって生かされ、養われました。このマンナというものがどういうものだったのか良く分かりませんが、聖書はこう告げています。「**朝には宿営の周りに露が降りました。16:14 この降った露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。16:15** イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。』」（出エジプト 16:13~15）また「**16:31 イスラエルの家では、それをマナと名付けた。それは、コエンドロの種に似て白く、蜜の入ったウェファースのような味がした。**」（出エジプト記 16:31）とあります。このパンが「マンナ」と重ねられることによって「**天から降ってきたパン**」そして「**世に命を与えるパン**」というイメージが重ねられます。つまり、「5千人の給食」のパンは、「朽ちない食べ物」「永遠の命に至る食べ物」、そして「天から降ってきたパン」「世に命を与えるパン」とイメージを重ねていきます。こうして少しずつ核心へと近付いていきます。そして遂に、イエス様がこの「パン」によって告げようとしていたことが明らかにされます。35節です。「**わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。**」これがイエス様が5千人の給食の出来事において、人々に示したかったことでした。この時、人々は子のイエス様の言葉を聞いても何をイエス様が言っているのか、良く分からなかったでしょう。「**わたしが命のパンである**」とは、「なるほど、そういうことですか」などと、すぐに頷けることではありません。しかし、このイエス様の言葉を礼拝の中で聞いた人々、つまりこの福音書が記されて、本来の目的であった主の日の礼拝の中

で読まれたとき、このイエス様の言葉は何の疑いもなく受け入れられ、納得して「アーメン」と言ったに違いありません。何故なら、このイエス様の言葉を礼拝の中で聞いた人々は、命のパンであるイエス様の体、永遠の命に至るキリストの体であるパンを、礼拝の中で受けていたからです。それが聖餐です。

### 3. 主イエスのもとに来る

ここでイエス様は「**わたしのもとに来る者は**」と言われました。この「**わたしのもとに来る者は**」  
「**決して飢えることなく**」と続きます。更にイエス様は「**わたしを信じる者は決して渴くことがない**。」と続けます。これは、同じことを別の言葉で反復して印象深く伝える技法です。ですから、「**わたしのもとに来る者**」というのは「**わたしを信じる者**」と同じ意味であることが分かります。つまり、イエス様を信じて、イエス様のもとに来た者は、決して飢えることなく、決して渴くことがないとイエス様は告げられたわけです。これは、イエス様の祝福の宣言、イエス様の祝福の約束と言って良いでしょう。

ここで私共は、マタイによる福音書5章における山上の説教の冒頭の言葉を思い起こします。今、その全てについて見ていくとまはありませんけれど、その冒頭の所だけ読んでみます。「**5:1 イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。5:2 そこで、イエスは口を開き、教えられた。**

**5:3 「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。**

**5:4 悲しむ人々は、幸いである、／その人たちは慰められる。」**

ここでイエス様は、ご自分のもとに来られた人たちに対して「幸いである」「幸いである」と告げられました。この時イエス様のもとに来た人たちはどういう人たちであったかと言えば、病気で苦しんでいた、貧しさの中で困窮していた、様々な苦しみや課題を抱えていた人たちでした。明日の生活どころか、今日の生活だってままならない、そういう人たちでした。そういう人たちが、イエス様のもとに来た。イエス様なら何とかしてくれるのではないかと期待したからです。イエス様を信じたからです。その人達に対してイエス様は「あなたたちは幸いだ」と告げられました。「心の貧しい人」。これはルカによる福音書ではただ「貧しい人」と言われています。ですから「心貧しい人」というのは、経済的には貧しくないけれど、心が貧しい人。そんな人のことではありません。「心が貧しい」というのは、頼るべきものが自分の中に何も無い人ということです。富もない、健康もない、技術もない、頼る人もいない。何もなし。そういう人に向かって、イエス様は「幸いだ。天の国はその人達、つまりあなたたちのものである」と告げられました。また、「悲しんでいる人」このような人が幸いであるはずがありません。しかし、イエス様は「幸いだ。その人達、つまりあなたたちは慰められる」と告げました。イエス様は一般的なことを告げているわけではありません。貧しい人も悲しんでいる人が幸いなはずがありません。こ

の言葉は、イエス様だけが言える言葉です。もし、皆さんが目の前で悲しんでいる人に向かすって「幸いです。良かったですね。」なんて言ったら大変です。では、なぜ、イエス様はそんなことを言えたのでしょうか？それは、彼らが、イエス様を信頼して、イエス様のもとに来たからにです。その目の前の人たちに向かって、イエス様は「幸いだ」と告げられました。ここが重要なところです。イエス様はご自身を信頼して、ご自身のもとに来た人を必ず幸いにするのがお出来になります。そのためにイエス様は来られたからです。まことの愛と、全能の御力をもって、その人を幸いな者へと変えることがお出来になる。そして、その幸いとはこの地上において何かを得という幸いではありません。「天の国」「御国」において与えられるものです。それをイエス様は間違いなく与えられる。だから「幸いだ」と宣言し、祝福されました。

#### 4. 誰も追い出さない

しかもイエス様は、37節で「**6:37 父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。**」とも言われました。私共は「あの人はこうだ、あうだ」と評価します。私共はその人のほんの少ししか知らないにもかかわらずです。私はこの年になって、本当に自分は自分のことさえ良く分かっていないということか分かってきました。妻のことも、良く分かりません。こう言えば、あう言うということは分かりますし、言うてはいけないことがあることも分かります。しかし、このようなリアクションをするときに妻の心の中で何が起きているのか、それは分かりません。結婚して39年になりますけれど、分からないことばかりです。しかし、父なる神様もイエス様も私共の心の奥底まで全てをご存じです。私共自身以上にご存じです。その上で「私の所に来た人を決して追い出さない。」と約束してくださいました。ありがたいですね。もし神様が「こういう人はダメ、あういう人はダメ」なんて言われたら、私共はみんなイエス様の御前から追い出されてしまうでしょう。しかし、イエス様は決して私はそんなことはしないと約束してくださいました。だから、私は牧師を続けることが出来ていますし、皆さんも神の子・僕として、キリスト者として、歩むことが出来ているわけです。良いですかみなさん。自分は神様の御前に集うのに相応しくない、そんな人は一人もいません。逆に、神様の御前に出るのに相応しい、正しい人、良い人、きれいな人も一人もいません。私共には御前に誇れるものなど何もありません。それにも拘わらず、神様は「わたしのもとに来なさい」と招いてくださいます。その招きによって、私共は今朝もここに集うことが許され、神様に向かって「父よ」と呼んで祈ることが許されているわけです。ありがたいことです。

#### 5. 飢えることなく、渴くことなく

先ほど、マタイによる福音書5章の冒頭の「幸いだ」というイエス様の祝福の宣言を聞きましたけれど、ここでイエス様が告げられているのも同じことです。イエス様は「**わたしが命のパンであ**

る。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」と告げられました。それは、第一には「神様が飢えることがないように、渴くことがないように、必要の全てを備えてくださる」ということです。第二に、人は食べなければ飢えますし、水を飲まなければ渴きます。食べものや水がなければ、私共は自分の命を保つことは出来ません。それは本当のことです。けれど、それはこの肉体の話です。しかし、イエス様がここで告げられているのは、この肉体の飢えや渴きではありません。人は様々な物を欲しがります。そして、それを手に入れても、それで満足することはありません。いつでも「あれが足りない。これが欲しい。」そう思います。例えば、人は毎月いくらあれば満足するでしょうか。15万円収入のある人はせめて20万円はほしいと思うかもしれません。では20万円収入のある人はどうでしょう。25万円か30万円くらいはほしいと思う。では、30万円の人は、50万円の人はどうでしょう。どこかで「もっと」或いは「もう少し多く」と思ってしまう。「足ることを知らない」からです。しかし、イエス様を信頼して、イエス様のもとに来た者は、自分が持っているものは神様が与えてくださったものであることを知ります。また、自分が神様に愛されていることを知ります。そこで生まれてくるのは「不足に対しての不平や不満」ではなく、「ありがたい」という感謝の思いです。そこで、人は初めて「足ることを知る」ことになります。

第三に、イエス様がここで告げておられるのは、それだけではありません。ここまでならば、「気持ちの持ちよう」という話で終わってしまうでしょう。イエス様が約束してくださったのは、そのようなところにはとどまりません。もっと、私共の思いを超えた祝福、私共の日常の感覚を遙かに超えた恵みです。それは、復活の命であり、永遠の命です。それを私共に与えると約束してくださいました。肉体の死によって終わる命ではない命、肉体の死を超えた命の約束をイエス様はしてくださいました。だから、飢えることなく、渴くことがいのです。この地上の一切の苦しみ、嘆き、痛み、悲しみを超えて、「幸いだ」とイエス様は宣言してくださいましたのです。私共も、今朝、イエス様を信頼して、イエス様の御もとに来ました。ですから、私共はみんなこのイエス様の祝福の約束を受け取れます。私共は、飢えることなく、渴くことなき命に生きる者にさせていただいています。まことにありがたいことです。

## 6. みこころを行うために

さて、イエス様は以上のような祝福の約束を与えてくださったのですが、それは自分が勝手にしていることではないと告げられます。イエス様は天地を造られた父なる神様の独り子ですが、イエス様と父なる神様はさの御心において一つです。イエス様はこう告げられました。「6:38 わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方（つまり父なる神様）の御心を行うためである。 6:39 わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。 6:40 わたし

の父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

神の独り子キリストは天地が造られ前から、天の父なる神様と共におられました。そして、キリストは父なる神様によってイエス様として、お生まれになりました。これがクリスマスの出来事です。では、父なる神様はどうしてイエス様を生まれさせられたのでしょうか。それは、イエス様を神のこと信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためでした。肉体の死で終わることなく、終わりの日（つまりイエス様が再び来られる日）その人たちが復活することができるようにするためでした。そのためにイエス様は来られ、そのためにイエス様は十字架にお架かりになりました。それが父なる神様の御心でした。

この神様の御心は、何度も繰り返して聖書で語られています。代表的な聖書の言葉は、ヨハネによる福音書3章16．17節です。「3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。 3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」

実にイエス様は、ご自身を信頼し、ご自身の所に来る者を救い、永遠の命・復活の命を与えるためにこの世に来られ、私共のために、私共に代わって一切の罪の裁きを引き受けられました。イエス様の御もとに身を寄せる者は決して追い出されることなく、必ず救ってくださいます。どんな困難の中にある人も、例外はありません。だから安心して良いのです。イエス様が「命のパン」となってくださいましたから、私共はイエス様を信じ（つまりイエス様を食べ）、イエス様と一つにさせていただき、イエス様が与えて下る復活の命に与る御国を目指して歩んでいきます。その歩みは、イエス様が父なる神様の御心を行われたように、父なる神様の御心に適う歩みでありたいと心から願います。神様を愛し、神様に仕え、隣り人を愛し、隣り人に仕える者として歩んでいきたいと心から願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、イエス様が私共の命のパンとして、私共に永遠の命・復活の命を与えてくださる方として来てくださったことを、御言葉を通して改めて心に刻まさせていただきました。ありがとうございます。自分のことばかり、目の前のことばかりに目も心も奪われてしまうような私共でありますけれど、イエス様を「我が主・我が神」と信頼して、永遠の命を目指して、御国を目指して、一日一日を歩ませてください。どうか、聖霊なる神様が私共の中に宿ってくださり、私共の歩みを守り、支え、導いてください。どのような時も、あなた様が共にいてくださり、最も良い道を与えてくださっていることを信じ、安心して一日一日を歩ませてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン